

ゆるしの話

皆さんは、誰かと喧嘩してしまったという経験はあるでしょうか。その時、喧嘩した相手と仲直りすることはできたでしょうか。私たちは皆罪人で、完璧な人間ではありません。弱さも欠けも抱えた者同士です。だから、学校でも社会でも家庭でも、生きていたら誰かとぶつかったりして喧嘩してしまうことって避けられません。子どもたちもお友達と喧嘩してしまうことってよくあると思います。大人だって、喧嘩してしまうことはよくあります。そんな時って、気分が良くないですよ。『本当に腹が立つ！もう絶対に赦さないぞ！』という気持ちでいっぱいになってしまいます。時にはそれで喧嘩した相手と完全に縁が切れてしまうこともあります。でも、それってすごく寂しいことですよ。人を赦そうとしても、なかなか赦すことができない私たちです。どうしたら人を赦せるのか、仲直りできるのか、そもそも赦して何なのか、今日は復活したイエス様のお話から、このことを皆で一緒に考えてみましょう。

今日取り上げさせてもらった聖書の箇所はヨハネによる福音書 20:19～23 です。これは復活されたイエス様がお弟子さんたちにその姿を現された場面に他なりません。イエス様を逮捕して十字架へと追いやったユダヤ人たちが、今度は自分たちも逮捕しにやって来るのではないかと恐れていたお弟子さんたちは、家の戸に鍵をかけて息を潜めていました。「イエス様が殺された。次は自分たちの番かも。ぶるぶる、ぶるぶる。」お弟子さんたちの心は恐怖でいっぱいです。

すると、そこへイエス様が来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われました。「鍵をかけていたのに、いつの間に？」驚くお弟子さんたちに、イエス様は手とわき腹をお見せになりました。すると、そこには十字架でできた傷がありました。「間違いない。イエス様だ。」お弟子さんたちは大喜びです。と同時に、イエス様が逮捕された時にイエス様を見捨てて逃げてしまったことを申し訳なく思いました。そんなお弟子さんたちに、イエス様は重ねて言われます。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」そう言

ってから、お弟子さんたちに息を吹きかけ、「聖霊を受けなさい」と言われました。

これが、今日の聖書箇所です。私は思います。イエス様が復活してそのお姿を現された時、お弟子さんたちは実はユダヤ人たちを恐れていただけではなくて、自分たちがイエス様を裏切り、見捨てて見殺しにしてしまったという事実にも脅えていたのではないかと。マグダラのマリアから復活の主に出会ったという話を聞いたが、もしイエス様が自分たちにもそのお姿を現されたとしたら何と言われるか、「よくも私を裏切り、見捨て、見殺しにしたな。あなたがたを一生呪ってやる」、そのように言われても仕方がない、そういう状況にお弟子さんたちはいたからです。

しかし、実際にそのお姿を現されたイエス様の口から出た言葉は、「あなたがたに平和があるように」という言葉でした。「私はあなたがたを赦しますよ。わたしがあなたがたと共にいる、その平安に満たされなさい。シャローム」。イエス様はそう言われたのです。この「シャローム」という言葉は、「スーパームーン」と呼ばれる大きな満月のような、そんなイメージの言葉だそうです。神様が一緒にいてくださっている、その感覚がいつもある、そしてその神様の配慮の中で満ち満ちていて、一つも欠けた所がない、そんな平和、平安を表す言葉だそうです。

こうした平和、平安に満たされなさいというイエス様の言葉は、「大丈夫。私が一緒にいるから、誰もあなたたちに危害を加えないよ」と、ユダヤ人たちを恐れていたお弟子さんたちに身の安全を保障するだけでなく、「イエス様に叱られる！」と心配していたお弟子さんたちを完全に赦す言葉に他なりませんでした。

見逃せないのは、こうした無条件の赦しの言葉が、イエス様がきちんと手とわき腹の十字架でできた傷をお弟子さんたちにお見せになった上で言われていることです。イエス様の赦しは罪の事実をなかったことにする、曖昧にする、そんなものでは決してありませんでした。それは、きちんとお弟子さんたちがしてしまったことを認識させたうえで、イエス様の方から一方的に与えられる赦しだったのです。この赦しに触

れて、お弟子さんたちは変えられたと思います。そして神様の平和を宣べ伝える者として、イエス様に遣わされていったのです。

さて、ここで私たちの普段の生活を振り返ってみれば、私たちはイエス様のように、自分の方からまず赦しを与えるということをほとんどしていないのではないのでしょうか。相手が謝ってくれば、相手が変わるなら赦すけれども、そうでなければ自分の方から赦すことなんてしない。そんなことがほとんどではないのでしょうか。相手が謝りも変わりもしないのに自分の方から赦せば、相手はきっと非を認めない、その辺がいかげんにされてしまうし、相手を調子づかせるだけだ。そう思っていないのでしょうか。そして、結局はお互いにまず相手が謝ること、変わることを期待して、いつまでも仲直り出来ない。そんなことが良くあるように思います。

でも自分の方から赦すということは、相手が変わらないといけないことをいい加減にすることでは決してありません。おかしいところはおかしいとして問いつつも、相手が謝ったり、変わったりするのを待つのではなくて、まず自分の方から赦すのです。それが仲直りの秘訣ではないかと私は思います。自分の方から愛ある態度、赦しの態度を取ることで、相手が変わることがあるからです。

ここで、2017年に105歳で亡くなられた日野原重明さんというクリスチャンのお医者さんの言葉をご紹介します。こんな言葉です。「私は『愛すること』の裏には、血の出るような苦しい自己犠牲、あるいは『恕し』があるのではないかと思います。ある人は私にこんなことをした、その人をゆるすなどとてもないと思い続けて、相手の心は何年待っても変わらないことがある。そうならば、自分の心の方を変えてみる。それが愛の基本的なアプローチの仕方であって、それには大変辛い思いがあるでしょう。……(中略)……私たちは大きな傷を受けたときにこそ、自分の生き方が問われるのです。……(中略)……『ゆるし』とは、人を信じて待つ『愛の心』です。」

赦しとは何かを言い表した、とても含蓄のある言葉だと思います。日野原先生が仰

るように、相手が謝るよりも変わるよりもまず赦すこと、それは本当に難しいこと、忍耐のいることでしょう。しかし他でもない私も色々な罪を抱えた存在で、それを神様がまず赦してくださった。そのことを思って、自分もそれに倣い、勇気をいただいて人を赦していきたいと願います。赦しの多い豊かな人生を、皆で一緒に歩んで参りましょう。

お祈りをいたします。 ——以下、祈祷——